

2009年  
6月25日  
木曜日

大学の空間の中で一番重要な場所はどこだろうか。教室だろうか、食堂だろうか、部室だろうか、体育館だろうか、グラウンドだろうか。人によって、答えは違ってくるだろう。しかし、大学は、今、知識を伝達する場所から知識を創発する場所へと確実に移りつつあると、ある大学のシンポジウムで聞き、なるほどと思った。偉い人の話を聞くと、現代の大学は、人間として生きていく力を与えるため、課題を発見できる人材を育成し、思考・表現など高次の能力を重視する場所に移りつつあるという。講義のための教室、それはまさに教えるということ、知識伝達の場にふさわしかった。しかし、それだけでは現在の大学の空間として貧弱だということだ。今後、大学という空間は、学生が自立し、異質な他人と付き合える力をつけるため

根岸 紳 教授 (計量経済学)

# 講義と食事の間に 新しい学びの場がある

に、教員と学生が議論し、ともに考える場所にならないといけないし、学生同士が共に教えあい、学びあう場所でなければならぬ。

校舎に入ったらまずオープンな共同スペースやラウンジがあり、そこで学生たちは集い、議論し、友情を深める。ときにはその空間に大学院生が入り、教員や職員も参加する。

今年の夏、経済学部にそのような空間ができたことは素晴らしい。この空間は、大学院生のとき、僕に数学と人生を教えてくれた先生の財政的貢献があったことも個人的にうれしい。このようなスペースについて、ある建築家は、三つのポイントを指摘している。まずなんといつても「きれいな空間である」という。次に、風通しの良さ、全体が見渡せることが大事、ガラス張りでどこからでも見える「オープン」なものでなければ

ならない。そして、三番目は、一つの部屋を多用途に使えるように、机や椅子は容易に移動できる「未完成」なスペースでなければならぬ。とくに机はいくつかで簡単に輪になることに適した形のものが最高だそうだ。三番目は、ゼミ教室にもあてはまるだろう。

他の学部の学生や先生たちと出会うもっと広い共同スペースも必要だ。どこでもIT利用ができる場所は不可欠だし、食べながら、飲みながら学習する場所も必要だろう。

MITはいつ訪問しても学習空間が変わっているといわれている。会社もITの導入により、職場の中の配置も大きく変えなければ生産性はあがらないといわれている。椅子や机の配置がそのままでもITを導入しても成功しないらしい。いつまでも一番いい場所に課長や部長の大きな机

があるのは、時代遅れなのだろう。大学もカリキュラムを変えるばかりでなく、それと同時に教室の空間も変えなければならないだろう。教室も、教卓が前にあり、それに向かつて学生たちのすべての席があるというままでいいのだろうか。これからの教室は、学生たちが向かい合い、教師はそのまわりをうろろろしている。教師には教卓に囲まれた席はいらないし、オフィスには部長や課長の固定席もなくなるかもしれない。

授業やゼミが始まるまでの居場所、授業やゼミが終わったからの居場所、教室と食堂の間で過ごせる居場所、このような居場所はこれから新しい学びの場となるだろう。日本が一番といわれている大学の先生はシンポジウムの最後でこう言い放った。「大学で最も理想的な学習空間は広い芝生です」。